

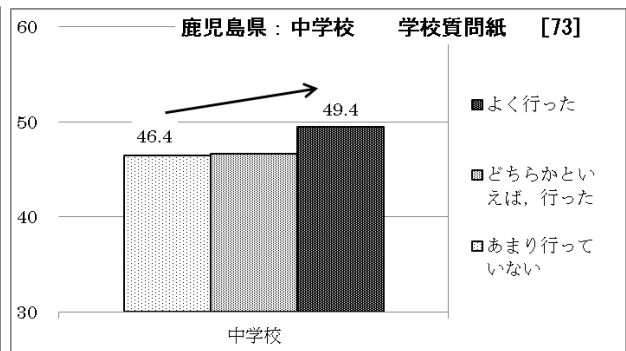
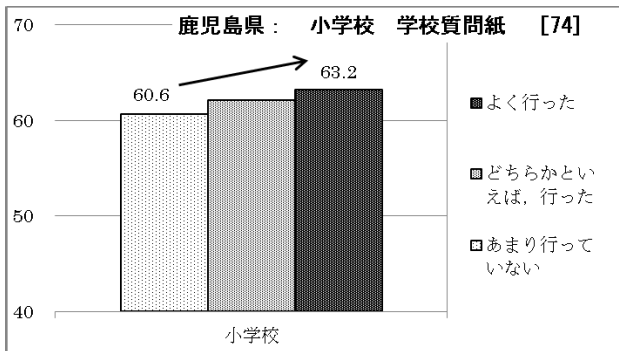
5 児童生徒質問紙及び学校質問紙の結果概要

(1) 理科に関する質問項目と学力との関係 (クロス集計結果)

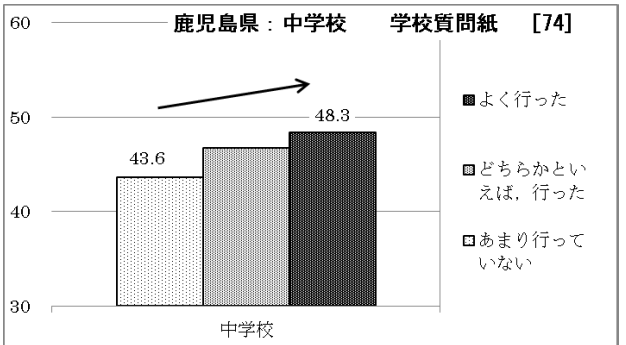
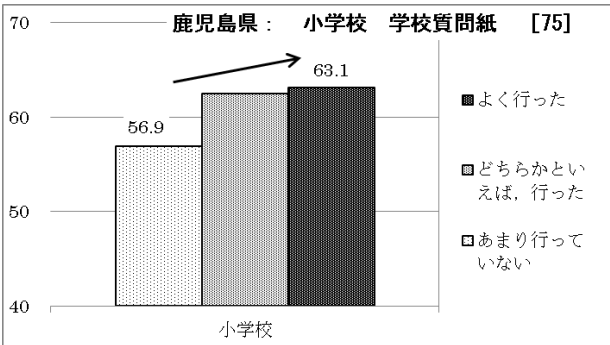
- ◆ 理科に関する指導方法と学力との関係では、次のような指導等を行った小・中学校ほど、平均正答率が高い傾向が見られる。

理科に関する指導方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 実生活における事象との関連を図った指導</li> <li>・ <u>自ら考えた仮説をもとに観察、実験の計画を立てさせる指導</u></li> <li>・ <u>観察や実験の結果を整理し、考察させる指導</u></li> <li>・ <u>観察や実験におけるカードやノートへの記録・記述の方法に関する指導</u></li> <li>・ 理科室での観察・実験を行う授業（中学校）</li> </ul>
------------	---

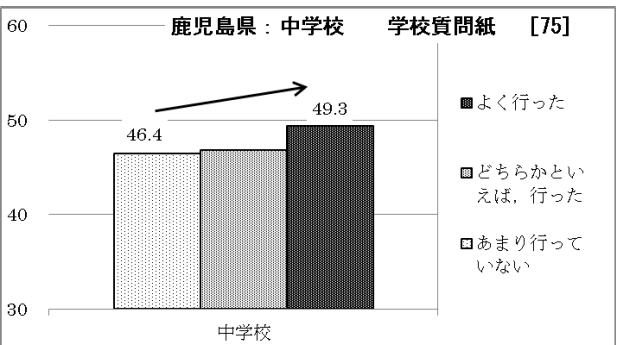
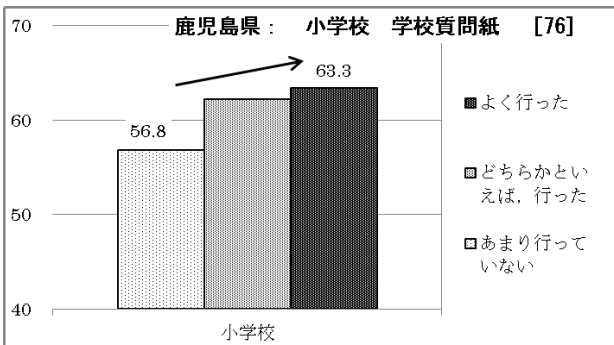
○ 調査対象学年の児童生徒に対する理科の指導として、前年度までに、自ら考えた仮説をもとに観察、実験の計画を立てさせる指導を行いましたか。(小 74, 中 73)



○ 調査対象学年の児童生徒に対する理科の指導として、前年度までに、観察や実験の結果を整理し考察する指導を行いましたか。(小 75, 中 74)



○ 調査対象学年の児童生徒に対する理科の指導として、前年度までに、観察や実験におけるカードやノートへの記録・記述の方法に関する指導を行いましたか。(小 76, 中 75)



- ◆ 理科学習に関する興味・関心・態度等と学力との関係では、次の事項に肯定的に回答している生徒の方が、平均正答率が高い傾向が見られる。

理科学習に関する興味・関心・態度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・理科の勉強は好き。</li> <li>・理科の勉強は大切だと思う。</li> <li>・授業の内容はよく分かる。</li> <li>・自然の中で遊んだことや自然観察をしたことがある。</li> <li>・授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考える。</li> <li>・授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思う。</li> <li>・将来、理科や科学技術に関係する職業に就きたいと思う。(中学校)</li> </ul>
理科の授業での取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の考えをまわりの人に説明したり発表したりしている。</li> <li>・観察や実験を行うことが好き。</li> <li>・自分の予想をもとに観察や実験の計画を立てている。</li> <li>・観察や実験の結果をもとに考察している。(どのようなことが分かったか考えている。</li> <li>・観察や実験の進め方や考え方が間違っていないかを振り返って考えている。</li> <li>・理科室で観察や実験を行う授業が多かった。(中学校)</li> </ul>

(2) その他の質問項目と学力との関係 (クロス集計結果)

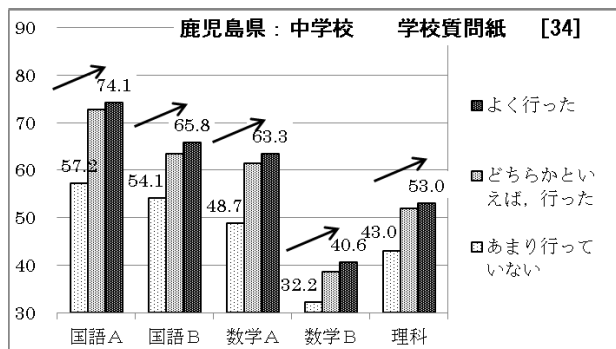
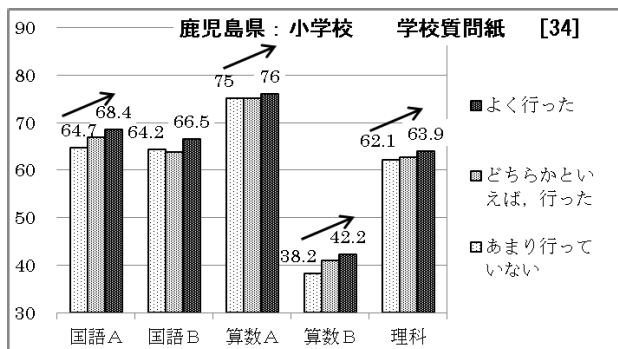
- ◆ 学校における指導等と学力の関係では、次のような指導等を行った小・中学校ほど、教科の平均正答率が高い傾向が見られる。これらは、昨年度までの結果とほぼ同様であり、今後も各学校における積極的な取組が期待される場所である。

指導方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業のはじめに、目標(めあて・ねらい)を示す活動や授業の最後に学習したことを振り返る活動の計画的な指導</li> <li>・本やインターネットなどを使った資料の調べ方を身に付けさせる指導</li> <li>・ICTを活用した子供同士が教え合い学び合う学習や課題発見・解決型の学習指導</li> <li>・発展的な学習の指導</li> </ul>
言語活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言語活動に重点を置いた指導計画の作成</li> <li>・様々な考えを引き出したり、思考を深めたりする発問や指導</li> <li>・自分の考えを相手に伝えたり、相手の考えを最後まで聞いたりするなど、話し合い活動における指導</li> </ul>
家庭学習	<ul style="list-style-type: none"> <li>・調べたり文章を書いたりしてくる宿題の提示</li> <li>・家庭での学習方法等についての具体例を挙げた指導</li> <li>・家庭学習の課題に対する評価・指導</li> <li>・課題の与え方に関する校内での共通理解や保護者への働きかけ</li> </ul>
学校としての取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校全体の学力傾向や課題の全教職員での共有</li> <li>・模擬授業や事例研究などの実践的な研修</li> <li>・学習指導と学習評価の計画作成における教職員同士の協力</li> </ul>

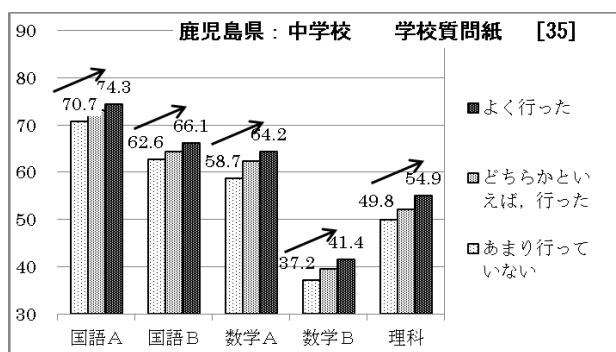
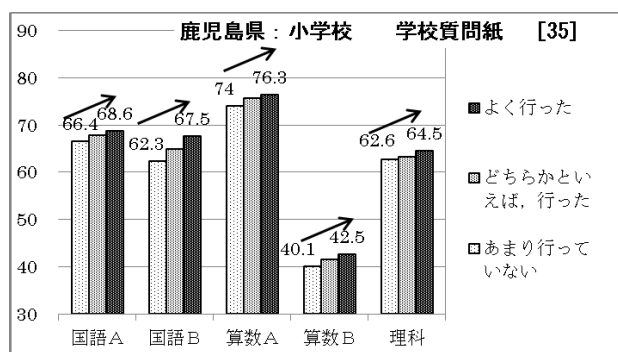
- ◆ 今年度新たに設けられた項目に関しては、以下の状況であった。特に、問題解決的な学習への取組について、小学校においては十分な成果が挙げられているとは言い難い結果となっている。授業のねらいを達成する活動となっているか、形だけの活動に終わっていないかなど、再検討して取組の充実を図りたい。

- ・授業で扱うノートに、学習の目標（めあて・ねらい）とまとめを書く指導  
→ 「よく行った」と回答している学校の方が、平均正答率が高い。
- ・学級やグループでの話し合いなどの活動  
→ 「よく行った」と回答している学校の方が、平均正答率が高い。
- ・児童生徒が学級やグループで課題を設定し、その解決に向けて話し合い、まとめ、表現するなどの学習活動  
→ 特に、小学校においては、「よく行った」と回答している学校の方が平均正答率が高くなっていないことから、活動の在り方に課題があったのではないかと考えられる。

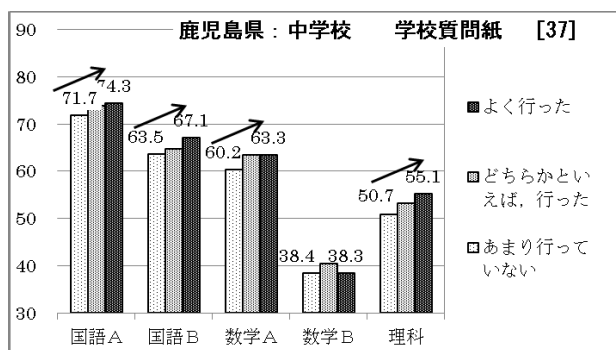
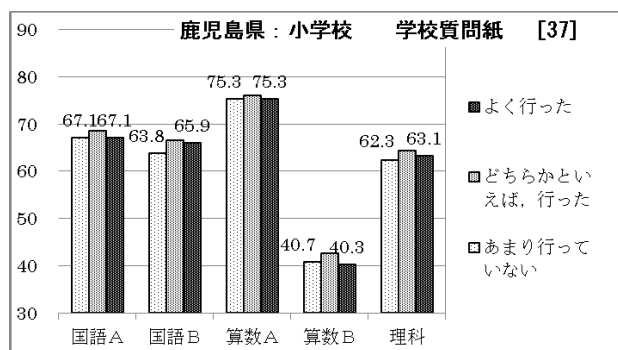
○ 調査対象学年の児童生徒に対して、前年度までに、授業で扱うノートに、学習の目標（めあて・ねらい）とまとめを書くように指導しましたか。（小・中 34）



○ 調査対象学年の児童生徒に対して、前年度までに、学級やグループで話し合う活動を授業などで行いましたか。（小・中 35）



○ 調査対象学年の児童生徒に対して、前年度までに、授業において、児童生徒自ら学級やグループで課題を設定し、その解決に向けて話し合い、まとめ、表現するなどの学習活動を取り入れましたか。（小・中 37）



(3) 児童生徒質問紙調査に見られる本県の傾向

【学習状況等に関すること】

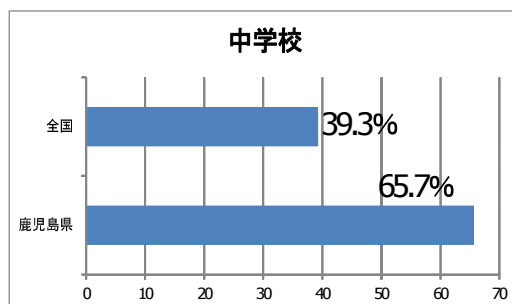
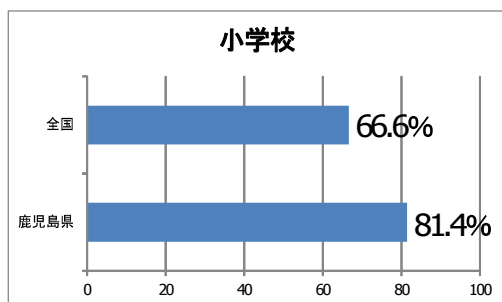
本県の結果を全国平均と比較すると、学習状況等については、授業において目標がしっかり示されていること、学校図書館等の利用頻度が高いこと、家庭学習は復習を中心に行われていること、授業で使うノートには目標とまとめを書いていること、理科の授業では観察や実験を行うことが好きで、週に1回以上は観察や実験を行っている学校ほど平均正答率が高いことが分かる。

また、自分の考えや意見を書くことを難しいと思っている児童や、工夫して自分の考えや意見を相手に伝えることができていないと思っている生徒がいる状況については、各教科等で言語活動を工夫するなど、児童生徒の主体的な学習を重視した授業に改善していくことが必要である。

※ 以下の囲みの中は、「当てはまる」、「どちらかと言えば当てはまる」などの回答の割合が全国と比べて差が大きかった項目である。(○は大きく上回ったもの、▲は大きく下回ったもの、以下も同様)

- 《小中共通》
- 授業のはじめに、目標（めあて・ねらい）が示されていたと思う。
  - 昼休みや放課後、学校が休みの日に、本を読んだり、借りたりするために、学校の図書館や地域の図書館に行く。
  - 家で、学校の授業の復習をする。
  - 前学年までに受けた授業で使うノートには、学習の目標（めあて・ねらい）とまとめを書いていたと思う。
  - 理科の授業では、理科室で観察や実験をよく行う。
  - 観察や実験を行うことは好きだ。
- 《小学校のみ》
- ▲ 400字詰め原稿用紙2～3枚の感想文や説明文を書くことは難しいと思う。
  - ▲ 学校の授業などで、自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりすることは難しいと思う。
- 《中学校のみ》
- 学校の授業時間以外に、普段（月～金曜日）よく勉強をする。（学習塾で勉強している時間や家庭教師に教わっている時間も含む）
  - 家で学校の宿題をする。
  - 「総合的な学習の時間」の授業で学習したことは、普段の生活や社会に出たときに役に立つと思う。
  - 1，2年生のときに受けた授業の最後に、学習内容を振り返る活動をよく行っていたと思う。
  - 数学の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思う。
  - ▲ 国語の授業で意見などを発表するとき、うまく伝えるように話の組み立てを工夫している。

- 前学年までに受けた授業で使うノートには、学習の目標（めあて・ねらい）とまとめを書いていたと思いますか



※ グラフは、「1 当てはまる」と答えた割合

### 【家庭や地域等に関すること】

全国平均との比較から、家庭や地域での過ごし方等については、地域行事への参加が多いこと、テレビゲームや携帯電話等の利用時間が短いこと、家族が授業参観等によく参加していることが分かる。

#### 《小中共通》

- 普段（月～金曜日）、テレビゲーム（コンピュータゲーム、携帯式のゲーム、携帯電話やスマートフォンを使ったゲームも含む）をする。
- 今住んでいる地域の行事に参加する。

#### 《小学校のみ》

※特になし

#### 《中学校のみ》

- 普段（月～金曜日）、携帯電話やスマートフォンで通話やメール、インターネットをする。（携帯電話やスマートフォンを使ってゲームをする時間は除く）
- 家の人（兄弟姉妹を除く）は、授業参観や運動会などの学校の行事に来る。

## (4) 学校質問紙調査に見られる本県の傾向

### 【指導方法等に関すること】

全国平均との比較から、学校の指導方法等に関することについては、一斉読書の時間の設定がよく行われていること、小学校における学校図書館の計画的な活用、コンピュータの活用、理科の指導と課題の評価、中学校におけるノート指導、習熟度別指導も盛んに取り組まれていることが分かる。小学校の算数におけるチームティーチングの指導が少ないのは、少人数指導等の実施が多いからだと思われる。

#### 《小中共通》

- 「朝の読書」などの一斉読書の時間を設けた。

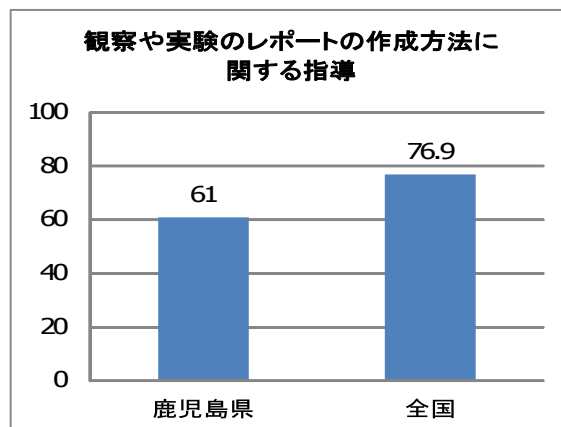
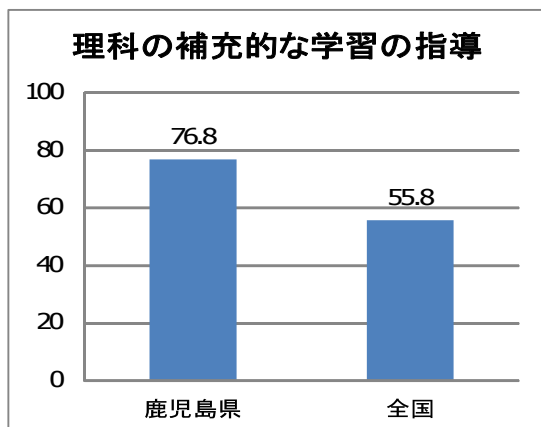
#### 《小学校のみ》

- 学校図書館を活用した授業を計画的に行った。
- 国語の授業において、コンピュータ等の情報通信技術（パソコン（タブレット端末を含む）、電子黒板、実物投影機、プロジェクター、インターネットなどを指す）を活用した授業を行った。
- 算数（数学）の授業において、コンピュータ等の情報通信技術（パソコン（タブレット端末を含む）、電子黒板、実物投影機、プロジェクター、インターネットなどを指す）を活用した授業を行った。
- 理科の授業において、コンピュータ等の情報通信技術（パソコン（タブレット端末を含む）、電子黒板、実物投影機、プロジェクター、インターネットなどを指す）を活用した授業を行った。
- 理科の指導として、前年度までに、補充的な学習の指導を行った。
- 理科の指導として、児童に与えた家庭学習の課題（長期休業期間中の課題を除く）について、評価・指導した。
- ▲ 算数（数学）の授業において、前年度に、チームティーチングによる指導を行った。

#### 《中学校のみ》

- 授業で扱うノートに学習の目標（めあて・ねらい）とまとめを書くように指導した。
- 数学の授業において、習熟の遅いグループに対して少人数による指導を行い、習得できるようにした。
- 数学の授業において、習熟の早いグループに対して少人数による指導を行い、発展的な内容を扱いましたか。
- ▲ 理科の指導として、観察や実験のレポートの作成方法に関する指導を行った。
- ▲ 言語活動に重点を置いた指導計画を作成している。

次のグラフは、全国との差が特に大きかった質問項目である。  
 〈小学校〉 〈中学校〉



※グラフは、よく行った、どちらかと言えばよく行ったと答えた割合

### 【家庭学習、人材・施設の活用、調査結果の活用等に関すること】

小学校においては、理科の指導として家庭学習の課題をよく与えていることが分かる。また、中学校については、家庭学習についての共通理解、校長による授業の巡視もよく行われている。博物館や科学館、図書館を利用した授業が少ない理由として、地域によっては近隣に施設が少ないことなども考えられる。

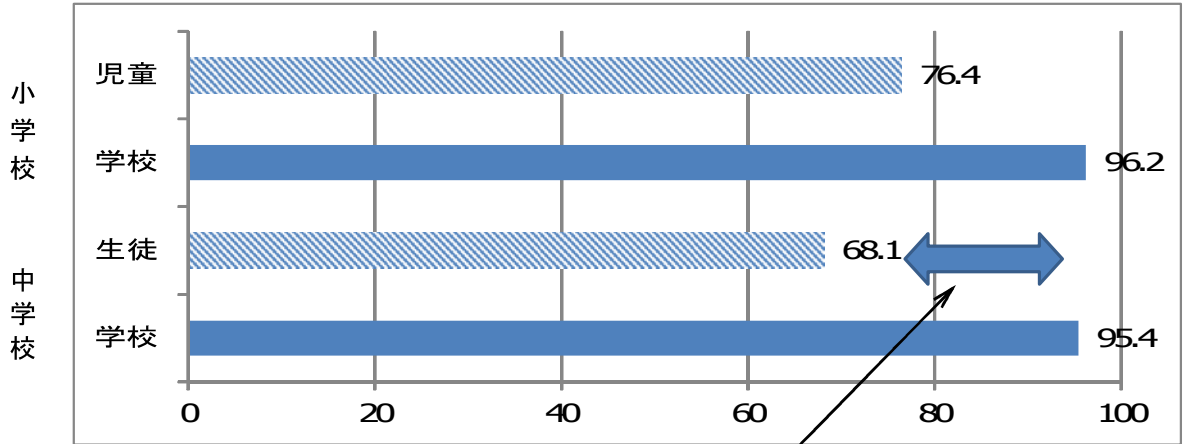
- 《小中共通》
- 理科の指導として、長期休業期間中に自由研究や課題研究などの家庭学習の課題を与えた。
  - ▲ ボランティアによる授業サポート（補助）を行った。
  - ▲ 博物館や科学館、図書館を利用した授業を行った。
- 《小学校のみ》
- 理科の指導として、家庭学習の課題（宿題）を与えた。
  - ▲ 職場見学や職場体験活動を行っている。
- 《中学校のみ》
- 家庭学習の課題の与え方について、校内の教職員で共通理解を図った。（国語／数学共通）
  - 校長は、校内の授業をよく見て回っている。
  - ▲ 地域の人材を外部講師として招聘した授業を行った。

### (5) 児童生徒質問紙調査と学校質問紙調査の比較

児童生徒質問紙調査と学校質問紙調査を比較すると、特に授業の最後の学習内容を振り返る活動について、教師と児童生徒の意識のずれが見られた。学校の回答を比べると、授業の最後に学習内容を振り返る活動を「よく行っている」と回答した児童生徒が少ない学校は、授業の最後に学習内容を振り返る活動をしたと答えていても、児童生徒がそのことをあまり意識していないという結果であった。

昨年度からすると、教師と児童生徒の意識のずれは解消されつつあるが、更なる取組の充実が必要である。

○ 授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っていますか。



約27%の生徒が、授業の最後に振り返りを行っていることを意識していない。

## 6 全体考察

### (1) 教科に関する調査及び質問紙調査から

- 国語科では、小・中学校ともに漢字の読み書きについては、全国と同じか、それ以上の正答率であった。また、日頃の学習の中で単元を貫く言語活動が位置付けられている様子が見える。  
一方、小学校では「文の中の主語を捉えること」、中学校では「語句の意味を理解し、文脈の中で適切に使うこと」に課題があった。目的や意図に応じて見出しを付けたり、伝えたい事柄が明確になるように文章の構成を考えたりするなど、言語事項に関する学習が、生活場面の中で活用できる力にまで高まっていない状況が見える。

そこで、資料から情報を得る学習でも、事実や意見をつかむとともに、書き手や話し手の意図や目的、その表現の方法を追究する活動の充実を図る必要がある。児童生徒が表現の主体者として、相手意識や目的意識、方法意識などの言語意識をもって表現できるようにするためには、教師が具体的なゴールイメージをもち、学習活動をしっかりと評価していくことが大切である。

- 算数・数学科では、小学校においては、A問題については、全国の状況とほぼ同程度の結果であったが、B問題においては、「示された情報を整理し、筋道を立てて考え、判断し、表現する力を問う問題」が、全国よりも下回っていた。中学校においては、特に「図形の性質に着目し、数学的な表現を用いて証明したり、多くの情報から必要な数値を取り出し、関係を読み取ったり、説明したりする力を問う問題」について課題がある。

そこで、思考力・判断力・表現力等を育てるため、「与えられた情報や条件から、言葉や数式、図、表、グラフなどの数学的表現を用いて論理的に考察し、表現したり、その過程を振り返って考えを深めたりする活動」等の充実を図ることが必要である。また、机間指導によりノートの記事等の状況を把握したり、評価問題等を用いて定着度を把握したりして、細やかに児童生徒の実態を捉えていくことが大切である。

- 理科では、問題の分類、区分を全国と比較すると、問題の枠組みとしては、「A問題」、問題形式では「短答式」が小・中学校とも全国を上回る結果であり、本県の児童生徒が理科における基礎的・基本的内容を身に付けている状況であることが分かった。一方、「B問題」、「記述式」の問題に課題が見られた。

小・中学校別では、小学校は、「結果を基に考察したり、性質を適用したりすること」を問う問題に、中学校は、「自然の事物・現象から問題を見出し、適切に課題を設定すること」や「予想や仮説を設定し、検証する実験を計画すること」を問う問題に課題が見られた。これらの課題は、小・中学校を通じての課題と捉えることができる。

そこで、小・中学校の理科の学習活動においては、観察・実験の結果を基に分析し、考察する活動、予想や仮説を設定し、検証する実験を計画する活動を重視していく必要があり、これらを支える問題（課題）意識を確実にもたせる指導が最も重要である。

- 学校における指導と学力との関係については、「ICTを活用した子供同士が教え合い学び合う学習や課題発見・解決型の学習指導」、「様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導」、「言語活動に重点を置いた学習指導」を行った小・中学校ほど、教科の平均正答率が高い傾向が見られ、児童生徒が能動的に授業に参加し、学習する工夫を行うことが、学力の向上につながっている様子が見える。

- 質問紙調査結果からは、全国と比較して「地域の行事によく参加する」、「家で学校の復習をよくする」、「平日の学習時間が長い」などが、本県の傾向として明確に表れている。

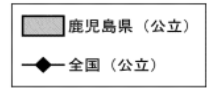
素直で、人や地域とのつながりを大切に、本県の児童生徒のよさが感じられる結果となっている。このようなよさを生かしつつ、児童生徒の「学び合い」を可能とする学級の雰囲気や基盤として学習活動を進めることが、「活用」に関する学力を培う上では重要である。

また、児童生徒質問紙調査の結果と学校質問紙調査の結果を比較したところ、「授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っていますか」という質問で、ほぼ全ての学校が「よく行った」、「行った」と回答したのに対し、小・中学生の回答は、それぞれ76.4%、68.1%と、教

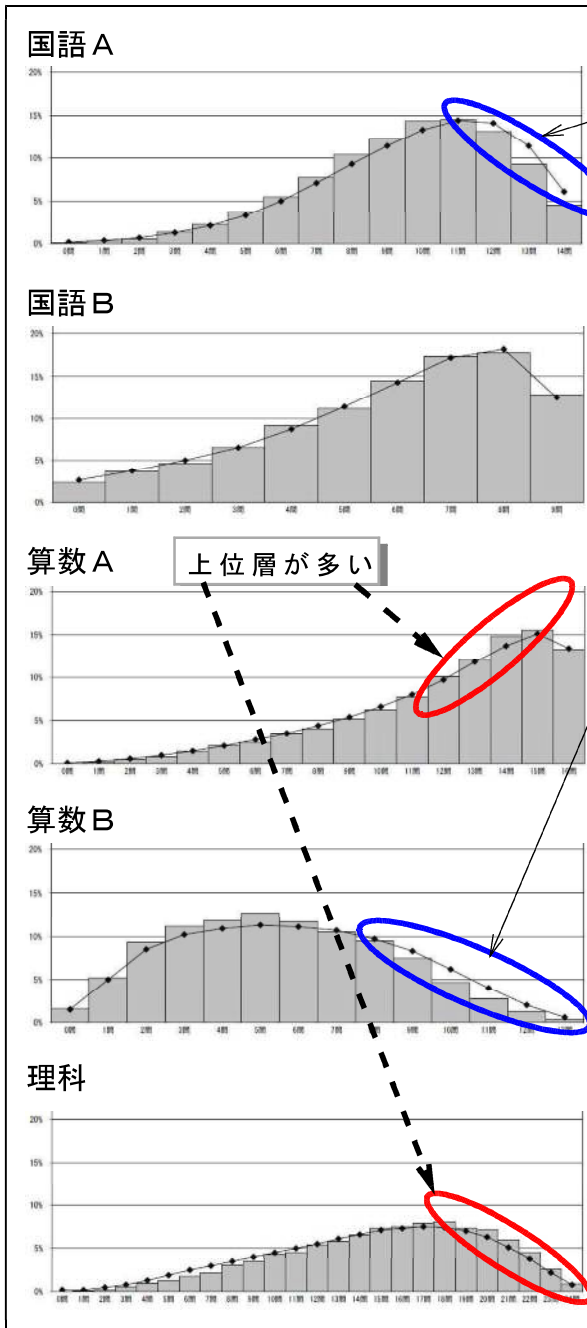


師と児童生徒の意識の差が昨年に引き続き継続している。児童生徒に、授業の振り返りを通じ学習内容を実感させることが学力の定着につながっていく。

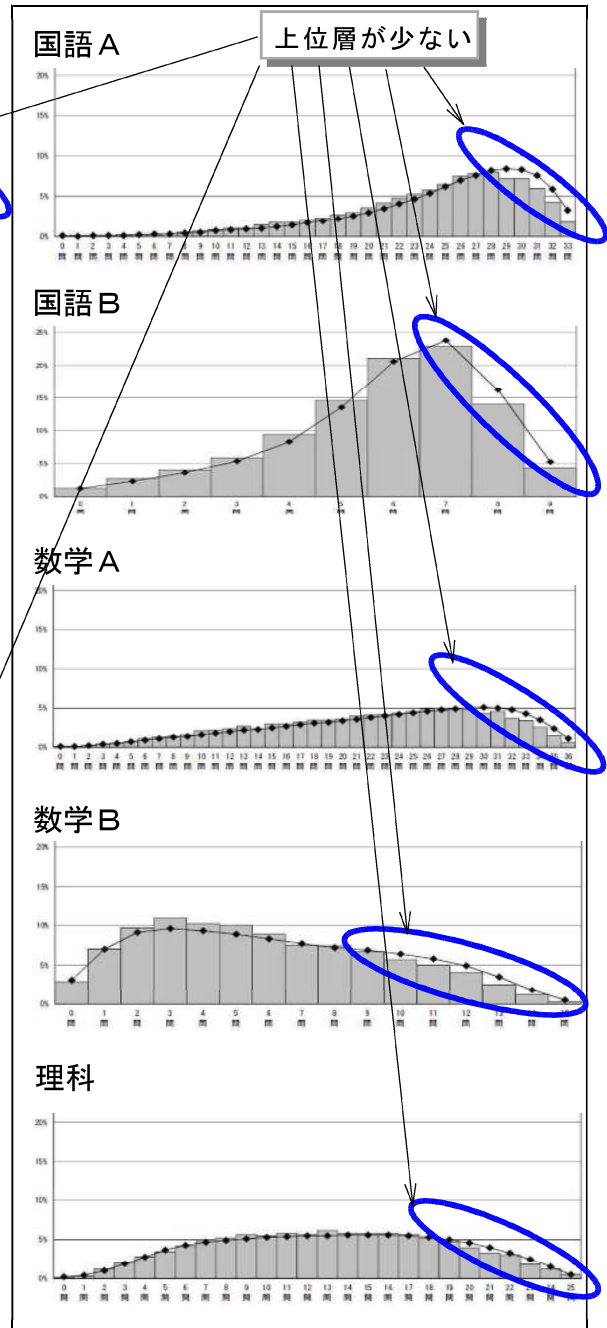
(2) 学力の全体的な現状と課題について（正答数の分布グラフ）



【小学校 6年】



【中学校 3年】



- 正答数の分布グラフにおいて本県と全国を比較すると、昨年同様、全国の正答率を下回った教科において、中位から上位にかけての層が少なくなっている。特に、算数B、数学Bにおいては、下位の層も多くなっている。
- 全国の平均正答率を上回った小学校国語B（+0.4%）、小学校算数A（+0.7%）、小学校理科（+2.6%）においては、中位から上位にかけての層が全国よりも多く見られる。

(3) 今後の方向性について

改善の視点

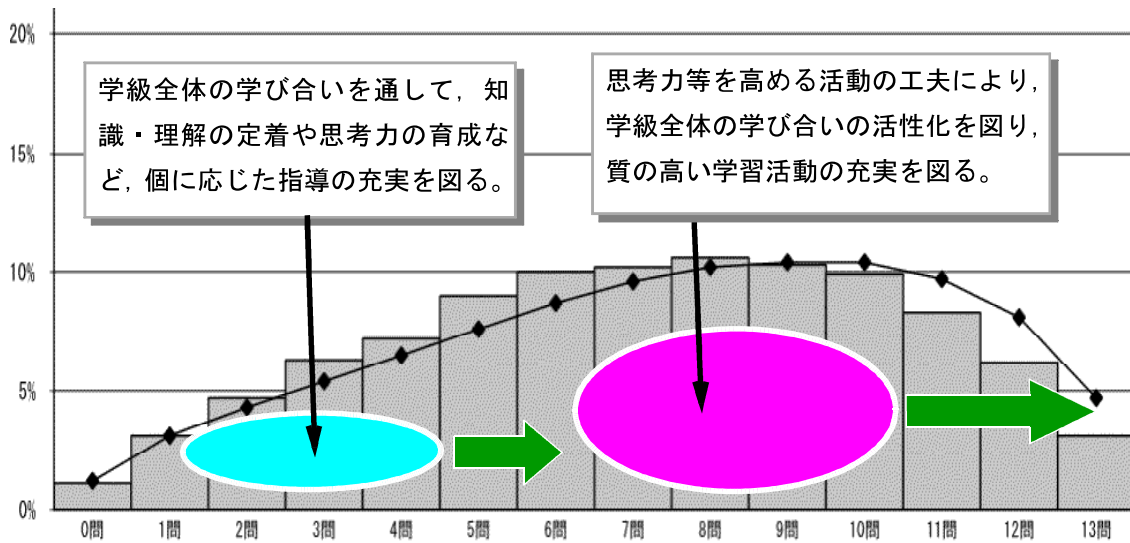
【明確な学習到達度】

- 思考力・判断力・表現力等を育成する学習活動を重視するとともに、授業や単元において目指す児童生徒の具体的な姿（到達度）を明確にする。

児童生徒による自己評価も効果的に取り入れ、個々の学習の状況や到達度を把握し、授業改善を図るとともに、児童生徒自身にも学習の状況や達成度を意識させる。

【思考力を高める学び合いの充実】

- 年間指導計画における重点化を図るなど言語活動の充実に向けてさらに工夫を図るとともに、下位層への手立てだけでなく、中位層への手立ても授業展開の中に位置付け、それぞれの児童生徒が思考力・判断力・表現力等を高めることができる活動の充実を図る。また、その際、課題解決の過程を実感できる活動、学級全体で学び合う活動を重視する。



【小中連携の一層の推進】

- 思考力、判断力、表現力等を養うのに効果的である問題解決的な学習について、小学校では多く取り組まれている一方で、その学習成果が十分に表れていない状況も見られた。これは、形の上では問題解決の過程で授業展開しても、児童生徒の問題意識が高まっていない状態で学習が行われていることが想定できる。より思考力、判断力、表現力等が求められる学習内容となる中学校では、その課題が表面化することにもなる。児童生徒の問題意識に基づく学習課題から展開される本来の問題解決的な学習への改善が進むよう、小中連携を深める必要がある。

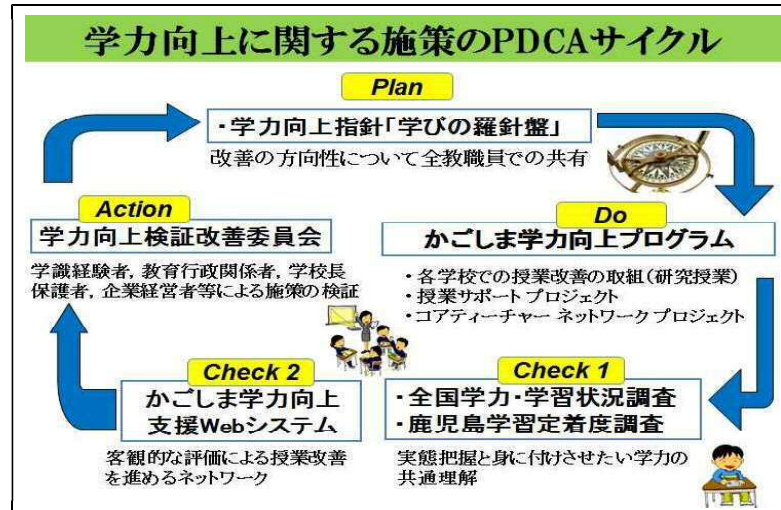
- 小・中学校の教員が、授業を相互に参観したり、指導法改善を協議したりする場の設定など、実際に教員の交流を通じた小中連携を進める必要がある。また、小・中学校の9年間を通じた学習の流れを意識して、授業を行うことが重要である。例えば、小学校では、取り扱う学習内容が中学校にどのようにつながるのかを意識して授業を行い、中学校では、小学校での既習内容や学習経験を踏まえた授業展開を工夫する必要がある。

【知識の習得と活用の一体化】

- 知識の習得と活用は、表裏一体である。他との交流の中で、学んだ力を発揮していく学習を充実させる必要がある。知識、技能については、暗記や繰り返しの練習だけでなく、活用を図る中で補充したり深化したりできるよう工夫することが重要である。

## 《今後の対応》

- 県教育委員会においては、これまで、様々な学力向上策を講じたところであるが、現在、推進している学力向上策をそれぞれ「Plan」「Do」「Check」「Action」のPDCAサイクルに位置付け、各事業の取組を把握し、評価し、次年度以降の施策の改善・充実に役立てることとしている。



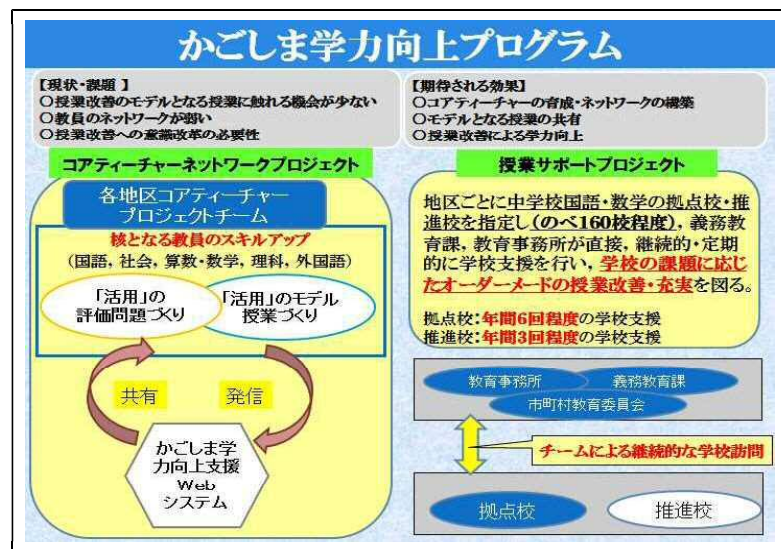
### □Plan (計画)

昨年度、県内の公立小・中学校に配布した「学びの羅針盤」を授業づくりの共通の指針として、全教職員の間で共有を図るとともに校内研修等を通じ各学校において積極的な活用を図る。

### □Do (実践)

質の高い授業への転換が不可欠であることから、今年度新たに「かごしま学力向上プログラム」を立ち上げ、各学校での指導法改善に向けた教員の協働体制を支援することとしている。

同プログラムは大きく「授業サポートプロジェクト」と「コアティーチャーネットワークプロジェクト」の2つの柱から成る。「授業サポートプロジェクト」は、教科専門の指導主事が教育事務所や市町村教育委員会と共にチーム



による継続した学校訪問を行い、教員の困り感を共有しながら、授業改善への取組を支援することで、指定校全体の授業力向上につなげるとともに、周辺校の教員の参加も促して波及効果を高めていく。

「コアティーチャーネットワークプロジェクト」においては、地域ごとに小・中学校の教員で構成するプロジェクトチームを作り、評価問題づくりやモデル授業づくりを通してミドルリーダーを育て、学校や地域の協働体制の核として活躍する場を広げる。

### □Check (評価)

児童生徒の学力の実態を客観的に把握する機会として「全国学力・学習状況調査」と「鹿児島学習定着度調査」を位置付ける。年度始めと3学期始めに実施されることの意義を生かして、自校の課題に対して早期に分析、改善を図ることが望まれる。また、年間を通じて課題である思考力・判断力・表現力を育むため、昨年度、構築した「かごしま学力向上支援Webシステム」を活用し、各学校の児童生徒の学習到達度を適時・適切に把握して指導法改善に役立てる。

□Action (検証)

学識経験者，企業関係者，保護者代表，学校長代表らで構成される学力向上検証改善委員会を設置し，県教育委員会の取組の成果や課題について検証し，今後の施策の改善・充実につなげる。

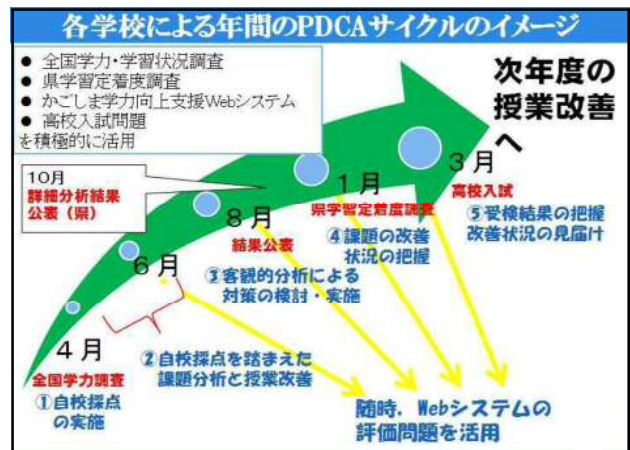


□ 各市町村においては，地域の課題に応じて取組の重点化を図り，県の学力向上策と地区等で進める施策との効果的な融合を図り，学校内の研修体制や学校，地域を越えた教員同士の交流を図る取組を推進することが必要である。特に，同一教科の教員同士の交流機会が十分でない市町村では，授業力向上を図るための研修の機会を設け，指導法改善に向けた教員の協働体制が確立されることを期待したい。

□ 各学校においては，何よりもまず「教師は授業力で勝負する」との意識をもって授業改善に取り組んでいただきたい。そのためには，管理職が学校の先頭に立ってリーダーシップを発揮することが何よりも重要であり，県教育委員会や教育事務所，市町村教育委員会の施策も踏まえながら，各学校の学力向上に係る課題解決につなげていただきたい。

□ 特に，各学校では，前ページで県教委が示したPDCAサイクルにならって，例えば下の図のような自校の学力向上に係るPDCAサイクルを確立されたい。その際，自校の学力の課題，その対応策，年間を通じた学力向上の取組の流れを全教職員で共有することが肝要である。PDCAサイクルの確立に当たっては，「かごしま学力向上支援Webシステム」や「学びの羅針盤」，「授業サポートプロジェクト」等の県教委の学力向上策を自校のPDCAサイクルに積極的に組み入れていただきたい。

□ 県内の多くの学校では思考力・判断力・表現力等に課題を抱えている。その解決のために，県教育委員会が整備した「かごしま学力向上Webシステム」を積極的に活用されたい。本システムには，各教科における単元や領域ごとの思考力・判断力・表現力等の到達度を問う評価問題等を掲載している。結果の入力後，即時に分析結果を把握することが可能であり，定着が不十分な部分については，補充指導に取り組み，身に付けなければならない学力については，各学年段階で確実に指導していただきたい。なお，前述のコアティーチャーネットワークプロジェクトにおいて評価問題を作成し，Webシステムに掲載していく予定であり，今後さらに評価問題の教科や単元・領域を充実することとしている。



- 前ページの「各学校による年間のPDCAサイクルのイメージ」に示しているとおり、各学校においては、全国学力・学習状況調査の実施後速やかに自校採点を行い、学力分析に基づき自校の課題を明らかにし、1学期中に指導法改善に取り組むことが重要である。来年度も今年度と同様、自校での採点結果を「かごしま学力向上支援Webシステム」に入力することが可能である。文部科学省による結果公表前に県内や地区、市町村の平均正答率等を把握することができるため、引き続き積極的な活用に努められたい。
  
- 県教育委員会では、児童生徒の確かな学力の向上を図るため、今年度の新規事業である授業サポートプロジェクトやコアティーチャーネットワークプロジェクトを推進することにより、児童生徒を支える環境の一体化を図りたいと考えている。県の教育課題を解決するには学校現場と県がこれまで以上に連携を強化していくことが不可欠である。そのため、義務教育課では本年6月にフェイスブックを立ち上げ、各種施策の進捗状況や特色ある学校の取組等についての情報をタイムリーに発信しているところであり、県内の教職員と県教委との間でこれまで以上に情報共有を図っていききたいと考えている。

鹿児島県教育庁義務教育課フェイスブックURL  
<https://www.facebook.com/gimukyoiiku.kagoshima>

